

説経・古浄瑠璃を題材とした絵画資料について

桑 汐 里

要 旨

能・狂言・歌舞伎では絵画資料を用いた研究が盛んに行われている。説経・古浄瑠璃も、演劇的な観点からの絵画資料の収集・分類が必要だが、これまで個別の作品論に留まっている。そこで本論では、説経・古浄瑠璃の物語を描く絵画である絵巻、絵本を収集し、系統分類を試みると共に、個々の資料の傾向と特徴について基礎的な考察を行った。はじめに、説経・古浄瑠璃の物語を描く絵画の現存作品四六点をリスト化し、書型、同系統の本文を有する正本との照合を行いながら、制作時期の整理を試みた。次に絵巻、絵本と正本の影響関係について、本文、挿絵の点から考察した。挿絵においては、正本の挿絵を流用した絵巻、絵本の作例は寛文頃成立の絵巻一点のみであることがわかり、主に版本を元に大量生産されてきた舞曲と対照的であることが判明した。また、説経・古浄瑠璃を題材とした扇面画・屏風が存在しないことも明らかになった。最後に、説経・古浄瑠璃から題材を得たと考えられる絵巻や絵本を、上演記録や内容を手がかりに要検討作品として列挙した。

はじめに

無類の芝居好きであった松平直矩の日記『松平大和守日記』万治四年（一六六二）二月十三日条には、「昔とかはりたる事は、さま／＼有といふうちに、上るりのさうしいろ／＼出来たり、あらましかそへて見るに、内にせつきやうのさうしも有、よき物の本はすくなし、思ひいたし次第に書のせる」とあり、以下、一七〇余りの作品名が列挙される。⁽¹⁾

当時の説経・古浄瑠璃の名寄として貴重である。浄瑠璃史における万治四年（一六六二）といえば、寛永（一六二四―）以降、浄瑠璃正本の形式が整えられ、書肆による活発な浄瑠璃本の出版が行われていた時期である。ここに名を記された「さうし」群は、そのような状況下で印刷によって流布した、今日の浄瑠璃史における「正本」とみなされがちであるが、同時期に、説経・古浄瑠璃は彩色豊かな絵巻や絵本―いわゆる奈良絵本―という形でも受容されていた。従来、これらの絵巻や絵本は、中世の成立とひとくくりにされ、古い語りを復元するための資料として活用されることが多い。だが、近年では多くの作品が中世よりもむしろ近世―特に寛文・延宝期―に量産されていることが次々と明らかにされ、奈良絵本Ⅱ中世の産物という捉え方は再考を迫られているといえよう。説経・古浄瑠璃研究においても、書肆や絵草紙屋の営みを考慮しながら、正本と同時代に流布したテキストとして絵巻・絵本を再検討し、個々の作品の成立背景を明らかにする必要がある。

加えて、能・狂言・歌舞伎といった芸能の分野では絵画資料を用いた研究がさかんに行われている。⁽²⁾ 説経・古浄瑠璃の絵巻や絵本も、演劇的な観点から収集・再分類が必要であるが、個別の作品論にとどまり、いまだ総合的な観点から行われてはいない。本論では、まず説経・古浄瑠璃の絵画資料の概要を示した上で、特に絵巻や絵本に焦点をあて、その特徴と系統について基礎的な考察を行いたい。

一、研究史概観

説経・古浄瑠璃の絵画化を考えようとするとき、同時代芸能の先行研究が示唆に富む。近年、絵画資料を用いた研究が急速に進展した能楽研究では、宮本圭造氏によって六つの絵画資料の分類案が提唱された。⁽³⁾

- A 芸を伝えるための絵画
- B 役者の面影を記憶する絵画
- C 風景の一つとして演能を描く絵画
- D 能・狂言の舞台を描く絵画
- E 能の興行を記録する絵画
- F 能の物語を描く絵画

右の分類を現在の説経・古浄瑠璃の研究状況に当てはめるならば、Cには、近世初期の風俗画に描かれた舞台図を集め、検証した人形舞台史研究会編『人形浄瑠璃舞台史』（八木書店、一九九一年）が、Fには、『浄瑠璃御前物語』の諸本を比較し、その語りの原態を追究した横山重・信多純一編著『じやうり 十六段本』（大学堂書店、一九八二年）や、松平家と古浄瑠璃絵巻群との関連を論じた深谷大『岩佐又兵衛風絵巻群と古浄瑠璃』（ぺりかん社、二〇一一年）などが該当しよう。従来の絵画資料への関心は、舞台や演出の解明や、『浄瑠璃御前物語』や岩佐又兵衛という著名な絵師の名を冠した限られた作品に光が当てられるばかりで、全体像に関する指摘はなされてこなかった。

説経・古浄瑠璃の物語を描く絵画といえば、例外もあるが、多くが絵巻や絵本として伝わっている。それらは、横

山重らによる『説経正本集』全三巻（角川書店、一九六八年）、『古浄瑠璃正本集』全十巻（角川書店、一九六四—一九八二年）の附録編に紹介される、あるいは徳田和夫編『お伽草子事典』（東京堂出版、二〇〇二年）で指摘されるなどして、徐々にその数が知られるようになった。ただ、それらは、説経・古浄瑠璃の正統なテキストとするには問題があり、そのことについて横山重氏は「説経正本に準ずる諸本」と題された論中で、以下のように述べている。⁴

わたしが、説経正本集二冊を刊行したのは、昭和十二年であつた。その時、小栗の古い正本をさがすことが出来なかつたので、とりあへず、手許の奈良絵本「おくり」を附録として、提出しておゐた。正本集と名乗つてゐる本に奈良絵本を附載することには、内輪でも反対説があり、わたしも気後れがしたのであるが、特にこの本（おくり）に限つて、提出することにした。

論では続けて、明暦二年（一六五六）刊の佐渡七太夫正本の写しである縦型奈良絵本『出世物語』（現在所在未詳）と、古説経の本文をもつ宮内庁三の丸尚蔵館所蔵の『をくり』を挙げ、絵巻や絵本の本文の有用性について説く。絵巻や絵本の多くは制作に関する記述を持たないため、刊行された正本と比較して本文の成立時期を見極める必要があつたのであろう。そこには、絵巻や絵本の本文が、刊行された正本を写したもののなか、刊行以前の古い語りを元にしたものなのかといった議論が伴う。絵巻や絵本が説経、古浄瑠璃のテキスト研究の傍流とされてきたのは、このような研究背景に起因しよう。ただし、絵巻や絵本の資料的意義が等閑視されてきたわけではなく、諏訪春雄氏に次のような指摘がある。⁵

奈良絵本という、我々は、中世の産物であり、精神も様式も中世を表現しているはずと疑問を持たぬが、しかし、事実は、その大半が近世の制作であつた。（中略）近世前期制作のおびただしい量の奈良絵本を総合的な視野におさめて、近世初期浮世絵として再検討することが中世から近世絵画への移行を解明し、浮世絵の成立と

展開の研究に大きく貢献することになるはずである。

絵巻や絵本を初期浮世絵とすることには問題が残るが、これらを中世末から近世初期にまたがる資料群とみなし、個々の作品が説経、古浄瑠璃の成立、受容、展開の、どの時点で制作されたのかを追究することは、研究史を新たな観点から問い直すことになるだろう。そのための一歩として、まずは説経・古浄瑠璃を描く絵画の現存状況を確認し、個々の作品の検討を試みたい。

二、説経・古浄瑠璃の物語を描く絵画

ここでは、「説経・古浄瑠璃を描く絵画一覧」と題して、現存作品を絵巻、絵本の順に示した。ここに挙げた資料は、すでに先行研究で本文が説経・古浄瑠璃の詞章と指摘されているか、あるいは、同系統の本文の正本が刊行されているものである。紙幅の都合上、すでに研究が備わる『浄瑠璃御前物語』と岩佐又兵衛風古浄瑠璃絵巻群は別途一覧化し、主要な作品のみを挙げた。説経に関しては、『かるかや』『さんせう太夫』『小栗』『しんとく丸』『愛護若』『松浦長者』のみを対象とした。

また、正本およびそれに関連する版本が刊行されている場合は、**版**に該当するテキストを示した。《》には、閲覧媒体を示し、▼には主要な参考文献を挙げた。所蔵機関には略称を用いた（チェスター・ビーティー・ライブラリーCBL等）。実見できていない資料に関する書誌および成立年は、参考文献に拠った。この一覧はあくまでも仮の物であり、今後の調査次第で見直すべき点が多々あるうことをお断りしておく。

絵巻

古浄瑠璃『浄瑠璃御前物語』 *岩佐又兵衛風古浄瑠璃絵巻群については別項目

・サントリー美術館蔵（赤木甲本）『しやうるり』三軸、十六段、天正後半から文禄、慶長年間の制作

・赤木文庫旧蔵（赤木乙本）『浄瑠璃姫物語絵巻』三軸、十六段、慶長、元和頃

・大鳥神社蔵『浄瑠璃』二軸、十二段、近世初期の制作

・ハーバード大学美術館『十二段草紙』二軸、十二段

・班山文庫旧蔵絵巻（零本）

・シカゴ美術館蔵『浄瑠璃』二軸

▼辻惟雄・坂田泉・信多純一解説『上瑠璃』（京都書院、一九七七年）

横山重・信多純一『しやうるり 十六段本』（大学堂書店、一九八二年）

石川透「じやうるり」解題（『新天理図書館善本叢書 奈良絵本集』五、八木書店、二〇一九年）

岩佐又兵衛風古浄瑠璃絵巻群（『をくり』のみ説経、それ以外は古浄瑠璃）

・MOA美術館『山中常盤』十二軸 元和末寛永初年（一六二三）頃

〔版〕幸田成友氏旧蔵『山中常盤』零葉、元和末寛永初年頃刊

・香雪美術館他蔵『ほり江卷双紙』七卷残欠 寛永初年（一六二四）頃

・宮内庁三の丸尚蔵館蔵『をくり』十二軸 寛永後半（一六三四—一六四四）頃

- ・MOA美術館蔵『上瑠璃』十二軸 寛永後半—正保・慶安（一六三四—一六五二）頃
- ・MOA美術館蔵『ほり江巻双紙』十二軸 慶安—寛文（一六四八—一六七三）頃
- ・海の見える杜美術館蔵『村松』十二軸 慶安—寛文（一六四八—一六七三）頃
- ・CBL蔵『村松』三軸 慶安—寛文（一六四八—一六七三）頃

▼辻惟雄『岩佐又兵衛 浮世絵をつくった男の謎』（文藝春秋、二〇〇八年）

深谷大『岩佐又兵衛絵巻群と古浄瑠璃』（ぺりかん社、二〇一一年）

辻惟雄・佐藤康宏監修・編著『岩佐又兵衛全集』絵画編・研究編（藝華書院、二〇一三年）

その他（全て古浄瑠璃）

- ・ドイツ国立図書館蔵『えんの行者』三軸、寛文頃 ≪お伽草子絵巻集と研究 西ベルリン本≫
- ・大英博物館蔵『えんの行者』三軸、一七世紀初期頃 ≪辻英子』在外日本絵巻の研究と資料≫
- ・CBL蔵『江島物語絵巻』一軸（上巻存）、近世前期写
- ・日本大学総合図書館蔵『ゑじま物語』二軸
- ・**版**山城少掾旧蔵『すまふの祝言はんかく女軍法ゑじま姫』一冊、寛文末延宝初年刊
- ・慶応義塾図書館蔵『ともなが』二軸、寛文から元禄期 ≪古浄瑠璃正本集』一≫

絵本

○説経

- ・ 思文閣古書資料目録二一四 善本特集二一『村松物語』一軸 慶長頃
 - ・ 逸翁美術館蔵『一若丸』一軸、元禄頃か《林久美子『近世前期浄瑠璃の基礎的研究』》
 - ・ 学習院大日語日文研蔵『よしうち』五軸、延宝く元禄頃《大島由紀夫『中世衆庶の文芸文化』》
 - * 早稲田大学演劇博物館蔵『義氏』一冊、慶安四年（二六五一）写↓正本写しと思しき写本
- 〔版〕大東急記念文庫蔵『ともなか』上巻一冊、寛永十四年（二六三七）刊、左内正本
- ・ サントリー美術館蔵『（せつきやうかるかや）』二帖、縦型特大本、室町時代末期《説経正本集》一、『つきしまかるかや―素朴表現の絵巻と説話画』》
 - ・ 天理図書館蔵『おくり』三冊、横型特大本《説経正本集》一〇
 - ・ 横山重旧蔵『出世物語』冊数不明《中世文学 研究と資料》
 - ・ 〔版〕天理大図書館蔵『さんせう太夫』上中下三冊、明暦二年（二六五六）刊、佐渡七太夫正本
 - ・ 個人蔵「しゆつせ物語」三帖、縦型半紙本《説経 人は神仏に何を託そうとするのか》
 - ・ フォーレツチコレクション蔵『さよひめ』三冊、縦型半紙本 ↓京大本、東洋文庫本とともに上方・江戸板説経正本の祖本（阪口論）《説経 人は神仏に何を託そうとするのか》
 - ・ 京都大文学部美術史学研究室蔵『さよひめ』三帖、縦型半紙本、近世初期《説経正本集》三〇
 - ・ 東洋文庫蔵『まつらさよひめ』二冊（中巻欠）、横型半紙本《人文研究》三四一四

・学習院大図書館蔵『さよひめ』二冊、縦型半紙本 《田中美絵『国語国文』六七―九》

版『まつら長じや』一冊、寛文元年（一六六一）刊

▼川崎剛志「絵画化された説経―絵巻・奈良絵本のさまざま―」（神戸女子大学古典芸能研究センター編『説経 人は神仏に何を託そ』）
は神仏に何を託そうとするのか』、和泉書院、二〇一七年）

阪口弘之「説経正本「松浦長者」の成立」（神戸女子大学古典芸能研究センター編『説経 人は神仏に何を託そうとするのか』、和泉書院、二〇一七年）

○古浄瑠璃

古浄瑠璃『浄瑠璃御前物語』

・大東急記念文庫蔵『十二段草子』二冊、特大本、室町時代末期 《大東急記念文庫善本叢刊》別巻》

・天理図書館（天理A本）『しやうるり御前物語』一冊（零本）、特大本

・天理図書館（天理B本）『しやうるり』二冊、特大本

・関川亨氏蔵『浄瑠璃』一冊（上巻欠）、特大本 《大阪大学文学部紀要》二〇》

・岩瀬文庫蔵『浄瑠璃姫物語』二冊（中下巻）、特大本 《江戸書物の世界 雲英文庫を中心にしたどる》

・角屋保存会所蔵『浄瑠璃姫物語』七十三丁。元は横型本か。六曲一雙屏風に貼付されていたものを冊子に復元。

《角屋研究》六》

・石川透氏蔵『浄瑠璃物語』断簡一二枚、元横型本。《古典資料研究》二七》

▼辻惟雄・坂田泉・信多純一解説『上瑠璃』（京都書院、一九七七年）

横山重・信多純一『しやうるり 十六段本』（大学堂書店、一九八二年）

その他

・高安六郎氏旧蔵『なほしま物語』二冊、縦型半紙本《古典文庫『古浄瑠璃集』》

・東大国文学研蔵『大橋の中將』二冊、特大本、江戸時代初期《室町時代短篇集》『古浄瑠璃正本集』一《

〔版〕大阪大学赤木文庫蔵『ちうしやう』上巻一冊、寛永初年刊

・平成二三年十一月東京古典会目録『公平法門あらそひ』三冊、大型奈良絵本、寛文延宝頃写

・CBL蔵『はなや』上巻一冊、特大本、江戸中期《在外奈良絵本》

〔版〕東洋文庫蔵『はなや』上下合一冊、寛永十一年（二六三四）刊、薩摩太夫正本

・臨川書店平成二四年夏季号目録『はなや』中巻のみ、江戸中期写

・東洋文庫蔵『むらまつ』二冊、特大本《古浄瑠璃正本集》一〇『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅷ—東洋文庫絵本コ

レクション』

〔版〕大東急記念文庫蔵『むらまつ』上下二冊、寛永十四年（二六三七）刊

・小野幸氏蔵『やまなか』一冊（四段）、縦一一・五糎、横一六・七糎、寛永頃の書写

〔版〕幸田成友氏旧蔵『山中常盤』零葉、元和末寛永初年頃刊

・天理図書館蔵『ゆみつぎ』下巻一冊、横型半紙本《古浄瑠璃正本集》九《

〔版〕天理大図書館蔵『ゆみつぎ』上下合一冊、正保五年（二六四八）刊、若狭守藤原吉次正本

・東大国文学研蔵『ゆみつき』三冊（絵欠）、横型半紙本、一部の題簽「松のふ」『古浄瑠璃正本集』一

版 正保五年（一六四八）刊正本

・龍門文庫蔵『ゆみつき』二帖、縦型半紙本、江戸時代初期『室町時代短編集』

版 正保五年（一六四八）刊正本

・慶應義塾図書館蔵『ゆみつき』二冊、横型半紙本『古浄瑠璃正本集』一

版 正保五年（一六四八）刊正本

概観すると、点数の多さ、成立時期の早さの点で、『浄瑠璃御前物語』が群を抜いている。また岩佐又兵衛風絵巻群も一作品につき十巻以上という点で、一覽の中で異彩を放つ。しかしながら、これら研究の蓄積がある絵巻、絵本以外にも、学習院大学附属図書館『よしうぢ』五軸や、慶應義塾図書館蔵『ともなが』三軸など、大部な作例が確認できる。『江島物語絵巻』『ゆみつき』のように複数の作例がある場合もある。全体数は、絵巻が二二点、絵本二五点、計四六点である。

次に絵巻・絵本の制作時期を考えてみたい。表1は、参考文献で言及された成立年を阪口弘之氏による説経・古浄瑠璃の本文の発達と関連づけながら作成したものである。⁽⁶⁾ 成立年の言及がない場合は、石川透氏が『奈良絵本・絵巻の生成』（三弥井書店、二〇〇三年）で示した絵巻・奈良絵本のかたちによる分類に基づき、妥当と思われる時期に配置した。I～Vの年代の区分については、『奈良絵本・絵巻の展開』（三弥井書店、二〇〇九年）の制作時期の分類に拠った。

浄瑠璃史の草創期にあたるI天正頃、II慶長頃は絵巻が中心であるが、IV寛文頃になると、この時代に量産された横型および縦型の奈良絵本が多く制作されるようになる。この絵巻、絵本の制作量の推移は、浄瑠璃正本の出版とも

連動をみせる。⁽⁷⁾ II慶長頃は、嵯峨本の『浄瑠璃』（焼失）や大本古活字版で挿絵部分に色変わり料紙を用いた東京大学総合図書館蔵『浄瑠璃』など、書型も大きく、挿絵数も多い、限定された読者層を狙っての刊行であった。III寛永頃に入ると、現存最古の古浄瑠璃正本である『たかたち』（寛永二年（一六二五）正月刊、横本）をはじめとし、およそ寛永期に一六点、正保期に一二点、慶安期に六点が相次いで刊行され、読み物としての正本の需要が一気に拡大する。この時期の冊数や行数に注目した説経、古浄瑠璃正本の体裁の変遷については、秋本鈴史氏の論に詳しい。⁽⁸⁾

なお、寛永二年版の『たかたち』は、先学により横本絵本『たかたち』を模した絵巻風の体裁であるとの指摘がある。⁽⁹⁾ 同体裁の小野幸氏蔵『たかたち』『酒呑童子』『山中常盤』『関原与一』の零葉とともに、早期の正本は横本であった。信多純一氏は、その挿絵について次の様に述べる。⁽¹⁰⁾

はじめ整版本においても奈良絵本の場合と同様、原絵巻の面影を出来る限り忠実に写そうと努めた。そのため横本にして、随時絵をさしはさむ。絵巻風に本文・絵・本文・絵と並べてゆく形もあれば、本文の間に絵をはさむような形、或いは見開き一杯を用いて、下方に絵を展開させ、その上部や空いたところに本文を配るなど、自在に作りなした。そしてそれらの絵には丹・緑・黄・紫などの粗い手彩色を施し、いわゆる丹緑本として発売した。

このように、寛永頃に刊行された正本が、当初は絵巻や絵本のかたちを目指した出版物であった点に注意したい。特に、傍線部の指摘は重要である。説経・古浄瑠璃のテキスト研究といえは、とかく印刷された正本に目を向けがちであるが、絵巻や絵本の方が正本よりも先に、読み物として世に流布していたのである。

IV寛文頃に入ると、刊行数は落ちるものの、江戸の書肆、鶴屋喜右衛門から読み物としての性格が強い絵入り大本『おぐり物語』『あいご物語』『さんせう太夫物語』が上梓される。この説経の絵入り大本はいずれも同一体裁であり、阪口弘之氏によって説経草子本シリーズとして刊行されたとの指摘がある。⁽¹¹⁾

表1

寛永正保期 語り物が浄瑠璃本として出版される時代	語り物時代 口頭で語られていた頃・ 操りと提携して間もない頃		阪口の 時代区分
Ⅲ寛永頃 (生産期) 1625-1657 寛永・正保・慶安・承応	Ⅱ慶長頃 (絢爛期) 1595-1625 慶長・元和	Ⅰ天正頃 (黎明期) 1565-1595 天正・文禄	
<p>大鳥神社蔵『浄瑠璃』二軸 ハーバード大蔵『十二段草紙』二軸 大東急記念文庫蔵『十二段草子』二冊 天理図書館蔵(天理A本)『しやうるり御前物語』一冊(零本) 天理図書館蔵(天理B本)『しやうるり』二冊 関川亨氏蔵『浄瑠璃』一冊(上巻欠) 岩瀬文庫蔵『浄瑠璃姫物語』二冊(中・下巻) 東洋文庫蔵『むらまつ』二冊【版】 香雪美術館他蔵『ほり江巻双紙』七巻残欠 小野幸氏蔵『やまなか』一冊【版】 東大国文学研蔵『大橋の中將』二冊【版】 宮内庁三の丸尚蔵館蔵『をくり』十二軸 MOA美術館蔵『上瑠璃』十二軸 慶應大学附属図書館蔵『ゆみつぎ』二冊 龍門文庫蔵『ゆみつぎ』二帖 東大国文学研蔵『ゆみつぎ(松のふ)』三冊 天理図書館蔵『ゆみつぎ』下巻【版】 MOA美術館蔵『ほり江巻双紙』十二軸 海の見える杜美術館蔵『村松』十二軸 CBL蔵『村松』三軸</p>	<p>思文閣古書目録『村松物語』一軸 MOA美術館蔵『山中常盤』十二軸【版】 赤木文庫旧蔵(赤木乙本)『浄瑠璃姫物語絵巻』三軸</p>	<p>サントリー美術館蔵(赤木甲本)『しやうるり』三軸 サントリー美術館蔵『せつきやうかるかや』二帖</p>	<p>絵巻・絵本の制作 ※【版】は版本に近い本文と指摘されるもの。</p>

説経・古浄瑠璃を題材とした絵画資料について（糸）

万治寛文期以降 同一体裁で説経の絵入り大本シリーズが刊行	
V元禄頃 (終息期) 1685-1715 貞享・元禄・宝永・正徳	IV寛文頃 (最盛期) 1655-1689 明暦・万治・寛文・延宝・天和
<p>CBL蔵『はなや』一冊（上巻存）【版】 逸翁美術館蔵『一若丸（村松物語）』一軸</p>	<p>天理図書館蔵『おくり』三冊【版】△ 角屋保存会所蔵『浄瑠璃姫物語』七十三丁 石川透氏蔵『浄瑠璃物語』断簡一二枚 横山重旧蔵『出世物語（さんせう太夫）』冊数不明【版】△ 個人蔵『しゆつせ物語』三帖△ 学習院大図書館蔵『さよひめ』二冊【版】 フォーレッチコレクション蔵『さよひめ』 京都大学蔵『さよひめ』三帖△ 高安六郎氏旧蔵『おしま物語』二冊 東洋文庫蔵『さよひめ』二冊△ ドイツ国立図書館蔵『えんの行者』三軸【版】 CBL蔵『江島物語絵巻』一軸（上巻存） 日本大学総合図書館蔵『おじま物語』二軸【版】 学習院大日語日文研蔵『よしうち』五軸 慶応大学附属図書館蔵『ともなが』二軸【版】 東京古典会目録『公平法門あらそひ』三冊 臨川目録『はなや』中巻</p>

絵巻、絵本にも、IV寛文頃になると、シリーズとはいえないものの、量産型の画一化された絵本が増えてくる。【表1】の中で△を付した作品は、川崎剛志氏によって「寛文頃の絵草子屋による典型的な造本」とされた絵本である。川崎氏は、先の寛文中末期頃の鶴屋喜右衛門による説経の大本シリーズに触れながら、「前述の如き絵草子屋と草子屋の活動の一環として、説経に取材した奈良絵本が制作され、また絵入り大本が刊行されたと推断される」とし、△の「寛文頃の奈良絵本」も、こうした「当時の書物の市場拡大の中で現れた商品」であると述べる。⁽¹²⁾

加えて【表1】の中で【版】を付したものは、正本と近い本文関係にあると指摘された絵巻、絵本である。写本と版本のどちらが先行するかは個々の作品の成立過程にもよるが、かつては口頭で語られ、上演されていた説経、古浄瑠璃が、この時期に文字化され、写本、版本双方で固定化されるようになったといえるだろう。現存数からみて市場に占める役割はわずかだが、説経、古浄瑠璃の絵巻、絵本、正本は、体裁や本文において、互いに影響を与え合いながら作られてきたとみてよい。

三、本文と挿絵について

それでは、絵巻や絵本は、本文と挿絵において、正本とどのような影響関係にあるのか。まずは本文について考えてみたい。なお、説経・古浄瑠璃の本文に関しては写本、版本を含め次の三段階で発展してきたという指摘がある。⁽¹³⁾

説経 ①語り物時代 ②寛永正保期 ③万治寛文期以降

古浄瑠璃 ①語り物時代 ②操り成立から正本刊行に至るまでの時代 ③寛永期

本論も本文の成立の前後関係を述べる際には、上記の区分を踏まえながら論じることにはしたい。

絵巻、絵本の本文を正本のそれと比較すると、主に（1）～（4）の特徴が確認できる。

（1） 正本あるいは版本と本文が一致する場合でも、絵巻、絵本の方が長い詞章を有する。

（例）慶應義塾図書館蔵『ともなが』、CBL蔵『はなや』

（2） 現存しない初期のテキストを写している可能性がある。

（例）絵巻『よしうち』―慶安四年写本『義氏』

（3） 古い語り物を元にしてしている可能性がある。

（例）慶應義塾図書館蔵『ゆみつき』

（4） 絵巻、絵本化にあたり、語り物に特徴的な表現が削除されている。

（例）個人蔵『しゅつせ物語』

（1）～（3）については、すでに個々の作品紹介で指摘されていることでもあるので、簡略に述べておきたい。（1）慶應本の絵巻『ともなが』は、上巻のみの寛永十四年刊行の左内正本と同系統の本文を有し、失われた下巻の本文をもつ貴重な一本である。しかし、両者は全く同一というわけではなく、比較すると、絵巻の方が一文の末尾や、各段の移り変わりにおいて、若干の長い詞章をもつ。一例として、冒頭部分を挙げてみよう。

正本 さてもそのうち、むさしさかみの国には、わたのはんくほんともなかとて、八か国になをゑたる、ゆみとり一人候て、

絵巻

とり侍りき、

むかしさかみのくに、和田の判官ともなか、とて、

八かこくに、名をえたる、弓

正本 御おほへめてたくし、ふつきのいゑにておはします、

御子一人もちたまふ、

絵巻 そのうへ、一もんひろしと申せとも、家をつくへき〔御子〕もち給はさるによつて、いかゝと思はれる
ところに、とし久しくして、
御子一人、いでき給ふ、

正本 すなはち御なをは、わたの太郎ともしけとて、いつきかしたてまつる、

絵巻 すなはち、わたの太郎ともしけとて、いつきかしたてまつる

傍線部を比較すると、正本で世継ぎがないことを省略したためにたどたどしい文章になっている箇所を、絵巻では丁寧な説明によつて展開する。物語の展開を損なうものではないが、絵巻のほうがより丁寧な叙述になっている。このような微細な異同は、絵巻化の際に増補されたのではなく、絵巻制作の元である本文が寛永十四年正本以前の、省略が施されていない本であつたために生じた現象であると考えられよう。この点については、寛永十四年以前の『ともなが』の伝本が出現しない限り確かめようがない。だが、後述する寛文頃の絵本、個人蔵『しゆつせ物語』が、本文の一部を古説経から摂取した事例をふまえると、絵巻、絵本制作の現場で蓄積されていた古い正本が、時を隔てて、絵巻や絵本制作に活用され、ふたたび世に流通することもあつたのではないだろうか。C B L本の『はなや』も制作自体は江戸時代中期とされるが、寛永十一年（二六三四）刊本と比較すると、C B L本の方が長い詞章を有しており、寛永十一年正本以前の伝本を元に制作された可能性がある。

上記のような絵巻、絵本と正本との前後関係の裏付けとなるのは、実際に（2）としてあげたように現存しない初期のテキストを元にした絵巻が存在するためである。すでに大島由起夫氏の論に指摘があるが、古浄瑠璃『義氏』⁽¹⁴⁾には、早大演博本の慶安四年写本、学習院大本の絵巻五軸、東大本の江戸版がある。この慶安四年写本は、内容から

古い古浄瑠璃の詞章をもつテキストとされているが、絵巻本文は、江戸版よりも、慶安四年写本に近い本文を有する。学習院大学本の絵巻は **表1** でいうIV寛文頃と、やや後年の制作ではあるが、その本文は現存しない古い正本を写し留めていると考えられよう。

以上は正本と本文校合が可能な絵巻、絵本の場合であるが、(3) であげた慶應本『ゆみつぎ』のように、正本と比較した結果、絵本の方が古く、「五部の本節」時代の古い語り物の詞章と判断されるものもある。⁽¹⁵⁾

(4) にあげた個人蔵『しゆつせ物語』絵本上中下三冊がその良き例である。この絵本は説経『さんせう太夫』の一伝本であり、縦型半紙本という装訂からIV寛文期に量産された典型的な奈良絵本とみられる。詳細は拙稿を参照された⁽¹⁶⁾が、この本文は、諸本中最も古い寛永末年頃刊行の天下一説経与七郎正本（以下、与七郎正本）と、それに次ぐ明暦二年（二六五六）刊の佐渡七太夫正本（以下、佐渡七太夫正本）に近い本文をもつ。上巻では、与七郎正本、佐渡七太夫正本と重なる箇所が多いが、中巻では、与七郎正本と独自本文が混在した複雑な本文となる。下巻になると、天王寺でつし王の足腰がたつという有名なエピソードは省かれ、北野神社を舞台にした独自の展開となる。語り物時代の説経説きたちは、自らが語る空間に合わせて物語の舞台を自在に変更した。個人蔵『しゆつせ物語』が北野を物語の舞台とするのは、初期の説経説きが活動していた頃の語り口が留められているためとみられる。

このように、個人蔵『しゆつせ物語』は、説経の中でも初期のテキストを参照し制作された絵本と考えられるが、その本文は、初期説経に独特の敬語法「おーある」が、「給ふ」などの別の表現に改められている。また挿絵にも、拷問される安寿の姿が描かれないなど、残酷な場面を排除するという特徴がある。『しゆつせ物語』という外題からも明らかのように、個人蔵本は、『さんせう太夫』を祝言の物語へと改編した絵本であった。本文や挿絵の改編は、説経のテーマといえる艱難辛苦を薄め、華やかな絵巻や絵本にふさわしい内容にするために必要な工程であったのだろう。

絵巻、絵本化に適した作品と、そうではない作品があったことを物語る。

次に挿絵の影響関係について見ていきたい。

現在の調査結果では、正本（ここでは正本から派生した版本）を元にした絵巻は、現在ドイツ国立図書館蔵『えんの行者』三軸しか確認することができない。この絵巻は、岩瀬文庫蔵の仮名草子風の版本と、本文・挿絵ともに近い関係にあるという。ドイツ本を紹介した沢井耐三氏によれば、両者の本文は「ほぼ同一」で、挿絵も、絵巻（十七図）、版本（八図）と、絵巻の方が多いが、そのうち五面の挿絵は、「その構図、人物の姿態などに顕著な類似が認められ、両者のいずれかが一方を参考にしたであろうことは疑えない」とする。⁽¹⁷⁾

版本との影響が認められる絵巻、絵本は、右の事例のみである。逸翁美術館蔵『一若丸』の絵巻など、一部正本と構図が一致しており、今後の検討を要する作品もあるが、現時点で説経・古浄瑠璃の絵巻、絵本には、版本を元にした作例が極めて少ないといえる。

この点数を同時代芸能である幸若舞曲と比較してみたい。小林健二氏の近年の報告によれば、幸若舞曲の絵画作品現存数は、絵巻が一二三点、絵本が二二八点、屏風が八点、扇面画が二点と、合計三百五十点以上もある。⁽¹⁸⁾ その多くが寛永年間に上梓された舞の本を元に行っていることは、小林氏が夙に指摘するところである。これとは対照的に、説経・古浄瑠璃は絵巻、絵本として市場に出回った数もわずかで、かつ版本を元にした挿絵がほとんど確認できない。この結果から明らかかなように、説経・古浄瑠璃の絵巻、絵本は、幸若舞曲のように版本を用いて大量生産する方法では作られてこなかったといえる。

刮目すべきは、説経・古浄瑠璃には、幸若舞曲の絵画のような屏風や扇面といった作例が一点も見つかっていないのである。扇面画としては、かつて佐野みどり氏によって「おそらくは古浄瑠璃であったと考えられる『大橋の中将』

の絵画化」とされたY家蔵幸若舞曲等扇面画帖が知られている。⁽¹⁹⁾しかし、この扇面画をお伽草子、古浄瑠璃双方の絵本の挿絵と比較すると、内容が古浄瑠璃である確証はなく、中には古浄瑠璃本文と相違する描写をもつ扇面画もみられる。そのため、厳密には古浄瑠璃の絵画作品とはいえない。⁽²⁰⁾

なお屏風として、留意すべき作例に、出光美術館蔵『浄瑠璃芝居看板絵屏風』六曲一双（伝菱川師宣）がある。後藤博子氏によれば、第一から第三扇はイェール大学図書館蔵『塩谷小次郎夜討対決』を題材とするらしいが、⁽²¹⁾「看板絵」とあるからには、これもまた当初は屏風として作られたとはいえないだろう。現時点で、扇面画、屏風といった絵画作品が現存しない理由について明確な答えを出すことは難しいが、説経・古浄瑠璃の絵画は鑑賞する媒体として、幸若舞曲ほどには需要がなく、種類も多様な展開を見せなかったことが想像される。この点については、今後も検討を重ねていきたい。

四、要検討作品について

ここまででは、すでに説経、古浄瑠璃のテキストと認められている、あるいは同時代に説経・古浄瑠璃正本が刊行されている絵巻、絵入り本について述べてきた。しかしながら、今日『説経正本集』全三巻、『古浄瑠璃正本集』全十巻に収められた作品だけが、当時の演目の全てではないはずである。冒頭で述べた『松平大和守日記』万治四年（一六六一）二月十三日条に列挙されていたように、その当時、数多の作品が流布していたのであり、その中には絵巻や絵本のみで読まれたものもあつたに違いない。あるいは、正本を元に作成され、絵巻や絵本だけが伝来したというケースもあるだろう。このような観点から注目したいのは、上演記録や、本文内容によって説経や古浄瑠璃と判断できる

絵巻や絵本である。これらの作品について、(1) 上演記録はあるが、正本がない作品、(2) 詞章が浄瑠璃と考えられる作品、(3) 奥浄瑠璃のテキストが存在する作品、(4) 浮世絵との境界線が曖昧な作品、の項目ごとに順次みていきたい。

(1) 上演記録はあるが、正本がない作品

・慶應義塾図書館「をときり」二帖、縦型半紙

・広島大学国文学研究室「よしのぶ」三冊、横型半紙本

『寛永日記』寛永四年(二六二七)十二月一日条に、「一、六ツ時斗ニ相済申候、オトギリト吉氏將軍トニ番ナリ、間々ニ狂言有之」とあり、西本願寺で薩摩浄雲が「オトギリ」「吉氏將軍」なる演目を語った記事がある。⁽²²⁾ 薩摩浄雲は草創期浄瑠璃界を牽引した初期太夫の一人である。「吉氏將軍」は、前掲「説経、古浄瑠璃を描く絵画一覽」にも挙げたが、正本、絵巻が伝わる『よしのぶ』のことであろう。一方の「オトギリ」は、慶應図書館に絵本『をときり』が確認できる。本作は鎮西の太守「ちけんの中將よしのぶ」が、宣旨により大番を勤めることとなるが、その間に家臣による謀叛が起こるといふ、武家物の物語草子である。本文に語り物に特有の文辞はないため断定はできないが、古浄瑠璃の作品が絵本化され、今日に伝わった一本の可能性がある。

また、外題の「をときり」とは「弟斬り」を意味すると思われるが、慶應本の本文で最後に斬首されるのは謀叛を起こした臣下であり、これと一致しない。しかし、この点は慶應本『をときり』と異本関係にある広島大学の『よしのぶ』を読むと氷解する。『よしのぶ』は、謀叛を起こす人物が実の弟であることや謀叛のいきさつが異なる以外は、主人公、娘、長男の身代わり、二人の若君(元服後)の名が、『をときり』と悉く一致する。登場人物名に限らず、二

人の若君の身代わりの場面や五条に掲げられた高札の場面といった物語の展開も共通するため、『よしのぶ』は、『をどぎり』と異本関係にあり、両者は共通の祖本から別々に派生した物語草子といえるだろう。元来、『をどぎり』も、『よしのぶ』のように謀叛を起こす人物が弟という設定で、それを最後に斬るという「弟斬り」の物語であった。しかし慶應本『をどぎり』の制作時に改編されてしまい、外題に名を留めたのではないか。『をどぎり』『よしのぶ』の事例は、正本が確認できずとも、絵巻や絵本というかたちで物語が伝わった例といえる。

・国文学研究資料館蔵『右近太夫』一冊、横型半紙本

本作は、二冊が合綴されており、二冊目の紺地金泥表紙中央に貼付された丹紙題簽に「右近太夫」と墨書される。冒頭より「さてもてんもんひらきつくつくと代のありさまをかんかへみれば」と始まり、「播磨国の藤原朝臣右近太夫有時」が主旨により丹波国大江山の鬼神退治を命ぜられ、見事討ち果たすものの、「能勢の大臣すけちか」に手柄を横取りされ、帰郷を果たせぬ間に御家騒動が勃発するという内容である。段分けは無いものの、古浄瑠璃に典型的な内容を備えている。『松平大和守日記』万治四年（一六六一）二月二三日条の説経、古浄瑠璃の草紙の一覧にみえる「藤原有時」とは本作のことであろう。伊達藩の支藩、田村藩の初代藩主による日記『瑞雲院殿御日記』明暦三年（一六五七）四月二二日条には、「しやうるり 有時 六段 源太夫 はりまの事」とみえ、浄瑠璃としての上演も確認できる。惜しいことに後半部分が欠けている上、挿絵の位置も改装時に入れ替えられており、物語の結末を知ることが難しい。端本ではあるが、他の伝存を聞かない貴重な一本である。

・慶應義塾大図書館蔵「はしひめ」上下二冊、横型半紙本

すでに指摘があるが、本文に浄瑠璃の形式句が散見され、浄瑠璃本を絵入り写本に仕立てたものとされる。⁽²³⁾ 上演記録ではないが、『松平大和守日記』万治四年（一六六一）二月十三日条の説経、古浄瑠璃の草子一覽に「橋姫」とみえる。

次に、(2) (3) の二項については、すでに指摘があるので、簡略にふれておこう。

(2) 詞章が浄瑠璃と考えられる作品としては、住吉大社蔵「月かげ」横型半紙本六冊があり、各冊の冒頭と末尾に「さてもそのうち」や、「申はかりはなかりけり」「くかんせぬ人はなかりけり」といった古浄瑠璃特有の文句がみえるため、六段の古浄瑠璃を六冊の絵本に仕立てたと考えられている。⁽²⁴⁾

(3) 奥浄瑠璃のテキストが存在する作品としては、国文学研究資料館蔵『御所まと』横本半紙本一冊がある。正月七日に頼朝の御前で開かれた御的始めの折に、畠山重保と梶原景季が弓の勝負をする話で、明治四三年（一九一〇）成立の奥浄瑠璃の伝本（五段本）が確認できる。比較すると、奥浄瑠璃本の後半部にあたる四段目以降が国文研本と合致するものの、前半部の一段と三段にかけての弓の勝負までのいきさつがみえない。国文研本に語り物の特徴的な文辞がみえないが、元は語り物であった物語を草子に仕立てた可能性がある。

これらの絵本は、おそらくマイナーな演目であったがゆえに説経・古浄瑠璃としては認知されず、今日お伽草子として分類されているが、本来は古浄瑠璃としても追究されるべきテキスト群である。孤本である場合が多く、複数の伝本が出現しないかぎり、これ以上の追究は難しい。⁽²⁵⁾ 個々の作品分析は今後の課題としたい。

(4) 浮世絵との境界線が曖昧な作品としては、諏訪春雄氏の、近世前期制作の奈良絵本を「近世初期浮世絵として再検討」すべきという提言が関わってくる。説経・古浄瑠璃の絵画化においても、一七世紀後半以後もなお制作が続

いていた奈良絵本と、同時期に花開いた浮世絵とを即座に切り分けることが難しい。このような作品としては、土佐浄瑠璃『名古屋山三郎』を絵巻化した遠山記念館蔵『名古屋山三郎仇討絵巻』が知られる。永瀬恵子氏の論によれば、同系統の絵巻が国会図書館、神宮文庫、岩瀬文庫にあるという。菱川師宣の版本「名古屋山三郎絵巻」（現存せず）をもとにしたとされ、奈良絵本というよりは浮世絵の範疇に入る作例と言えようか。一六世紀半ばから一七世紀半ばに渡る説経・古浄瑠璃の絵画作品を概観するにあたり、どこまでを区切りとすべきか。文学史でいえば、近松門左衛門作『出世景清』貞享二年（一六八五）上演以後は、古浄瑠璃と義太夫並行時代となり、やがて古浄瑠璃は終焉を迎える。一方で、絵画は時代区分やジャンルを意図せずに制作されてきたのであり、現段階では奈良絵本、浮世絵を問わず関連作品すべてを調査対象とし、一点一点ずつ分析する必要があると考えている。

五 説経、古浄瑠璃の物語を描く絵画の享受

以上、説経・古浄瑠璃の物語を描く絵画について、作品の現存状況と個々の作品の特徴を述べてきた。存疑の作品も含め五〇点弱と、同時代の芸能の幸若舞曲とくらべると規模は小さいが、説経、古浄瑠璃を絵で楽しもうとする需要が少なからずあったようだ。これらを享受した人々は、どのような文化的環境にあった人々であろうか。次に、これら絵画作品の享受の実態について考察したい。

すでに指摘があるが、読み物としての説経、古浄瑠璃の享受の記録は、『言継卿記』天正十六年（一五八八）九月一日に「九郎衛門尉摂州多田郷へ宿ヲカへ行丁、上ルリノ本返了」とあるのが最も古い。「上ルリノ本」が、浄瑠璃本全般のことなのか、または作品としての『浄瑠璃御前物語』を指すのかは定かではないが、いずれにせよ当時すでに

語り物を読む習慣があったことは確かである。本論で度々引いてきた『松平大和守日記』万治四年（一六六一）二月十三日条の草子一覽からは、その習慣が定着した様相をうかがうことができる。

絵入りの読み物としての享受は、近年盛んな岩佐又兵衛風古浄瑠璃絵巻群の研究が挙げられるだろう。深谷大氏の研究によれば、MOA美術館が所蔵する『山中常磐』十二軸、『上瑠璃』十二軸と、海の見える杜美術館蔵『村松』十二軸、残欠本の『堀江』七軸に、松平忠直が与えた鉄砲伝書と同じ見返紙、軸付紙が用いられていること、また『堀江』以外の三点の図版が大正十四年（一九二五）五月の東京美術倶楽部の売立目録に掲載されていることから、越前藩主松平忠直の周辺の注文による制作であることが定説となつている。⁽²⁹⁾ また津山松平家愛山文庫にはMOA本『山中常磐』と海の見える杜本『村松』に対応する三点の古浄瑠璃系写本が伝わる。⁽²⁹⁾ 江戸藩邸の書籍目録『書籍目次 扇号』や明治四年九月制作の愛山文庫の『拝借御書物目録』に『上瑠璃』『山中常磐』『村松』『堀江』の書名がみえ、藩主の側室や藩臣らに読まれていたという。これは希有な例で、他藩の大家家の記録、書籍目録、蔵帳、道具帳等を手繰ってみても、こうした語り物を読んだ、あるいは、絵画として受容した形跡はほとんどつかめない。

なお、傍証ではあるが、幕末期、江戸幕府により編纂された『通航一覽』の朝鮮王国へ送られた屏風（贈朝屏風）の画題は、享受とはいえないまでも、興味深い問題を投げかけてくれる。この贈朝屏風の記録は、美術史研究において近世初期の御用絵師たちの動向を知る資料として注目され、その詳細は榊原悟氏の著書『美の架け橋 異国に遣わされた屏風たち』⁽³⁰⁾（へりかん社、二〇〇二年）にまとめられている。また国文学でも画題のうち物語絵・武者絵に関して言及した星瑞穂氏の論があり、よく知られた記事ではある。だが、語り物研究の観点から見渡すと、当時上演されていた古浄瑠璃の演目や、その正本画題が散見される点が注意される。第六回の明暦元年（一六五五）の屏風の画題一覽をみてみたい。⁽³¹⁾ この年、二十双の屏風が制作されたが、その中に、「碁盤忠信 一双 土佐広通」や、「和田合

戦 一双 土佐広通」といった、古浄瑠璃と題材を同じくする画題がみえる。⁽³²⁾『碁盤忠信』の正本は、すでに星瑞穂氏の指摘にあるように、延宝四年（一六七六）刊の『碁盤忠信』が知られる。『和田合戦』の古い正本は伝わっていないが、贈朝屏風の制作からわずか六年後、『松平大和守日記』万治四年（一六六一）二月十三日条の草子一覽に「わだいくさ」と見え、また、現存伝本としては端本ながら次の三本が確認されている。⁽³³⁾

・ 東京大学図書館「三浦物語（和田軍）」上方板。焼亡。『頼原古浄瑠璃資料ノート』の記載による。

・ 早稲田大学演劇博物館蔵「和田軍」二百字詰原稿用紙五十八枚、上方板。東大本の写しか。

・ 横山正氏蔵「三浦物語」端本（三段目、四段目のみ）。延宝頃の江戸板。板心に「わた」とあり。

内容は『吾妻鏡』第二十一・建保元年（一二二三）五月小二日三日の和田義盛の反乱を題材とした、和田一族による鎌倉御所攻め、朝比奈三郎の門破り、一族の自害、巴御前と若君の逃避行、朝比奈三郎の救出、上総入道安静の斬首と朝比奈三郎の出世といった、和田一族の滅亡を描いた軍記浄瑠璃である。特に横山氏蔵本は、阪口弘之氏により『松平大和守日記』とつながる一本」と評価されており、早稲田本と横山本を併せ読むことで、当時の語りの面影を知ることができる。こうした書物の流布のみならず、当時、芝居小屋での上演や、大名の各藩邸での浄瑠璃操りによっても、物語は世間に周知されていたであろう。⁽³⁴⁾無論、佐藤忠信や、和田一族を描いた他の文学ジャンルもあるため、これらの画題が古浄瑠璃から採られたと即断することはできない。しかしながら、古浄瑠璃を描く絵画の享受をうかがうことのできる事例として、参考までにあげておきたい。

まとめ

以上、雑駁ながら、現存する説経、古浄瑠璃の物語を描く絵画について概観してきた。横山重氏がいうように、絵巻や絵本という類いの資料は、正本を軸とした語り物研究においては、それに「準ずる」資料として位置づけるべきものなのかもしれない。しかしながら、元来、正本は絵巻や絵本を手本として生み出されたのであり、正本のみを優位に立たせ論を進めるのなら、書肆の営為という限られた営みの中で語り物文化を理解することになる。従来の正本を軸とする研究方法に異論はないが、絵巻や絵本という資料群を掘り起こし、従来のテキスト研究に援用することで、正本のあらたな理解につながればと考えている。また、絵巻や絵本、あるいはそれ以外の絵画資料には、文字を伴わない語りの世界がある。そのような本文と挿絵の重要性を明らかにするためには、個々の作品を丁寧に読み解いてゆくほかない。この点については、稿を改めて論じることにした。

※本研究は科学研究費補助金・若手研究（「判官物」の語り物の基礎的研究―幸若舞曲・説経・古浄瑠璃の影響関係の究明―）（課題番号 19K13084）による成果の一部である。

〔注〕

- (1) 『日本庶民文化史料集成』より引用。
- (2) 能については小林健二『描かれた能楽 芸能と絵画が織りなす文化史』（吉川弘文館、二〇一九年）、狂言につ

いては藤岡道子「狂言の古図から見えてくるもの―江戸時代以前の演技・演出を推考する―」（『芸能史研究』一九五、二〇一一年）、「絵画資料に見る江戸初期の狂言」（『能と狂言』一一、二〇一三年五月）、歌舞伎については諏訪春雄『歌舞伎史の画証的研究』（飛鳥書房、一九七四年）など。

- (3) 宮本圭造「能・狂言と絵画―描かれた能・狂言の系譜―」（『能楽研究』三五、二〇一三年三月）。また、二〇一七年に楽劇学会におけるシンポジウム「絵画からみる楽劇史」が開催され、音楽（楽器）からは高桑いづみ氏、能からは小林健二氏、狂言からは藤岡道子氏、浄瑠璃からは田草川みずき氏、歌舞伎からは石橋健一郎氏が登壇され、芸能史研究における絵画資料の意義や可能性について活発な議論が交わされた。説経・古浄瑠璃に関する意見はなかったが、研究方法に関して、多大なる示唆を得たことを付言しておく。

- (4) 横山重「説経正本に準ずる諸本」（久松潜一編『中世文学 研究と資料』至文堂、一九五八年）

- (5) 諏訪春雄「初期浮世絵としての奈良絵本」（『近世芸能史論』一九八五年）。

- (6) 阪口弘之「操浄瑠璃の語り―口承と書承―」（『伝承文学研究』四二、一九九四年五月）、「説経「荊萱」諸本解題―万治板以降の展開について―」（『近松の三百年』和泉書院、一九九九年）。

- (7) 説経、古浄瑠璃正本の挿絵の展開については、信多純一「浄瑠璃本の挿絵―浄瑠璃史に関連して―」（諏訪春雄ほか編『図説 日本の古典 近松門左衛門』集英社、一九七九年）を参照した。

- (8) 秋本鈴史「古浄瑠璃『燈台鬼』の時代」（『歌舞伎 研究と批評』九、一九九二年六月）、「寛永期の浄瑠璃」（鳥越文蔵・内山美樹子・渡辺保編『岩波講座歌舞伎・文楽 第七巻 浄瑠璃の誕生と古浄瑠璃』岩波書店、一九九八年）。

- (9) 『古浄瑠璃正本集』一、口絵解題（横山重）、阪口弘之「操浄瑠璃の語り―口承と書承―」（『伝承文学研究』四

二、一九九四年五月)。

(10) 信多純一氏、前掲注の論による。

(11) 神戸女子大学古典芸能研究センター編『説経稀本集』所収『あいご物語』解題(和泉書院、二〇一八年)。

(12) 川崎剛志「絵画化された説経―絵巻・奈良絵本のさまざま―」(神戸女子大学古典芸能研究センター編『説経人は神仏に何を託そうとするのか』和泉書院、二〇一七年)。

(13) 阪口弘之「操浄瑠璃の語り―口承と書承―」(『伝承文学研究』四二、一九九四年五月)、「説経「荳菴」諸本解題―万治板以降の展開について―」(『近松の三百年』和泉書院、一九九九年)。

(14) 大島由起夫『『よしうち』とその周辺―お伽草子・古浄瑠璃の武家物諸篇をめぐって―』(『中世衆庶の文芸文化 縁起・説話・物語の演変』三弥井書店、二〇一四年)。

(15) 『古浄瑠璃正本集』一、附録解題(横山重)。

(16) 拙稿「説経・古浄瑠璃を題材とした絵巻・絵入り写本制作の一樣相―個人蔵『しゆつせ物語(さんせう太夫)』を例に―」(『総合研究大学院文化科学研究』一一、二〇一五年三月)「個人蔵『しゆつせ物語』解題・翻刻」(神戸女子大学古典芸能研究センター叢書『説経節―人は神仏に何を託そうとするのか』和泉書院、二〇一七年)。

(17) 沢井耐三「役行者」解説(『お伽草子絵巻集と研究 西ベルリン本』未刊国文資料刊行会、一九八一年)。

(18) 小林健二『舞の本絵巻』の制作をめぐる諸問題―付、幸若舞曲の絵入り本一覽稿(増補改訂)』(『国文学研究資料館紀要 文学研究編』四三、二〇一七年三月)。

(19) 佐野みどり「扇面画における伝統と創造」(『風流・造形・物語 日本美術の構造と様態』スカイドア、一九九

- 七年）。
- (20) 詳細は拙稿「国文学研究資料館蔵『大橋の中將』翻刻・略解題」（小峯和明監修『日本文学の展望を拓く』五巻、笠間書院、二〇一七年）を参照されたい。
- (21) 後藤博子氏の二〇一三年度科学研究費補助金（課題名「地方芸能文化形成と都市演劇文化摂取の実態研究」）実施状況報告書による。
- (22) 宮本圭造「古浄瑠璃史再檢」『上方能楽史の研究』（和泉書院、二〇〇五年）。
- (23) 『古浄瑠璃正本集』八、解題。
- (24) 『古浄瑠璃正本集』十、解題（横山重）。
- (25) 内容が古浄瑠璃とされる絵巻、絵本は、東京都立図書館蔵『せんみつ丸』など、他にも存在する。
- (26) 永瀬恵子「英一蝶の画卷様式一考―「名古屋山三郎絵巻」の制作をめぐる―」（『人文論究』三五―二〇、一九八五年九月）。なお、太田記念美術館蔵にも『不破名護屋敵討絵巻』があるとのことだが、未見。
- (27) 阪口弘之「人形浄瑠璃の形成」（諏訪春雄・菅井幸雄編『講座 日本の演劇 4 近世の演劇』勉誠社、一九九五）。
- (28) 深谷大「津山藩主松平家伝来古浄瑠璃系写本」（『岩佐又兵衛絵巻群と古浄瑠璃』ぺりかん社、二〇一一年）。
- (29) 現在、岡山県津山市津山郷土博物館所蔵。
- (30) 星瑞穂『通航一覽』にみる「贈朝屏風」の画題と外交―「碁盤忠信」を中心に―（『中世の物語と絵画』竹林舎、二〇一三年）。なお「贈朝屏風」という語については、武田恒夫「贈朝鮮国王屏風について」（『日本美術工芸』六三九号、一九九一年二月）に拠った。

(31) 『通航一覽』は正編三二二卷、附録二三卷、続輯一五二卷、附録二六卷からなる。永禄九年(一五六六)の三河国片浜浦に漂着した安南船の記事から文政八年(一八二五)の異国船打払令の公布にいたるまでの記事を含む、原本は嘉永六年十二月に完成、幕府に献上され、安政五年(一八五八)に紅葉山文庫に収められたが、明治六年(一八七三)五月に火災により焼失。現在は明治初年の写本が東京大学史料編纂所にあり、これを底本とした国書刊行会から広く用いられている。本論も、引用はこの国書刊行会本に拠りつつ、『東洋美術大観』五に引かれる「朝鮮御用屏風御入用等書付」も参照した。

(32) 絵師の土佐広通(住吉如慶)は江戸時代初期に設立した住吉派の初代・住吉如慶(一五九九—一六七〇)のことで、禁裏や幕府の絵画制作に関わっていた。「第三章 やまと絵の新たな庇護者―徳川將軍家と住吉派―」『住吉派研究』藝華書院、二〇一七年)によれば、如慶が手がけた軍記物の絵画として東京国立博物館蔵『堀川夜討絵巻』、出光美術館蔵『木曾物語絵巻』や、先の第六回明暦元年の贈朝屏風の作例があるという。このうち東博本の『堀川夜討絵巻』に関しては、黒木祥子「堀川夜討」解題(演劇研究会編『歌舞伎浄瑠璃稀本集成』上巻、八木書店、二〇〇二年)があり、それによると詞書は「流布本の平家物語、舞の本の「堀川夜討」、『義経記』を取り合わせて作った本文」であるという。また『松平大和守日記』万治四年二月十三日条の草子一覽に「堀川夜討」があること、寛文三年正月七日堺町での芝居演目に「堀川夜討」とあること等をふまえ、東博本が寛文以前の成立とすれば『松平大和守日記』の記事と同時期にあたり「古浄瑠璃正本を絵巻化した例は幾つか存在するので、この絵巻もその可能性は高い」のではないかと説く。黒木氏は、一曲の浄瑠璃としては長さが短いこと、詞書に古浄瑠璃特有の形式句がないことから古浄瑠璃絵巻と断定することは控えている。なお、同じ第六回の贈朝屏風を手がけた絵師に、勝田竹翁や狩野春雪がいる。勝田竹翁にはボストン美術館蔵

『曾我物語絵巻』や東京国立博物館蔵『富士巻狩』が、狩野春雪には九軸もの大部な『夜討曾我絵巻』の作例が知られており、当時の絵師たちが『曾我物語』や舞の本といった語り物の題材を積極的に取り込んでいた様相がうかがえる。勝田竹翁や狩野春雪に関しては、以下の論を参照した。

- ・宮腰直人「勝田竹翁筆『富士牧狩』考」『曾我物語』研究序説（『立教大学日本文学』一一一、二〇一四年）。
- ・中村玲「表絵師・勝田竹翁の御用について——『孔子・顔子・曾子像』と共箱からみる制作活動」『実践女子大学美術史学』三一、二〇一七年三月）、「勝田竹翁の画業と款印に関する考察」『実践女子大学美術史学』三三、二〇一九年三月）。

・谷川ゆき「狩野春雪筆『夜討曾我絵巻』九巻本について」（海の見える杜美術館編『二〇一九年春期特別展 幸若舞曲と絵画——武将が愛した英雄たち』二〇一九年）

(33) 横山正「浄瑠璃『三浦物語』の史的位置 併載、端本『三浦物語』」（『近世演劇論叢』清文堂出版、一九七六年）、阪口弘之「軍記説物浄瑠璃の成立——浄瑠璃と草子本——」（『人文研究』三七―七、一九八五年二月）。

(34) 武井協三「松平大和守直矩の日記——越後写本と若月写本」（『若衆歌舞伎・野郎歌舞伎の研究』八木書店、二〇〇〇年）をはじめとし、後藤博子氏の一連の論考に詳しい。

An Introduction to the Illustrated Book and
Scrolls of *Sekkyo* and *Kojoruri*

KUME Shiori

Sekkyo and *kojoruri*, classical puppetry plays, were popular art forms in the 16th and 17th centuries, and numerous *sekkyo* and *kojoruri* works inspired illustrated books and scrolls. Although there have been considerable studies on visual materials related to *noh kyogen*, *kowaka dance*, and *kabuki*, little research has been conducted on visual materials related to *sekkyo* and *kojoruri*. This paper examines approximately 46 visual materials (illustrated materials), including, books, scrolls, folding screens, and fans, considering the properties and trends of each material. Although it is generally accepted that illustrated books and scrolls in this period were made based on printed books, as with the *kowaka* genre, this paper finds that virtually no illustrated books and scrolls of *sekkyo* and *kojoruri* were made based on printed books. Based on these findings, this paper goes on to examine *Tsukoichiran*, a list of titles of folding screens exported to China, and discovers that there was a social environment in the 17th century where people were familiar with and communed with *kojoruri* visual materials.